

死神の眷属となった白 兔

鬼塚虎吉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは死神の眷属になってチートするベルの話です。
気分転換に書いた物ですが楽しんでいただけたら嬉しいです。

ソード・オラトリアの方でタナトス・ファミリアが出てきてしまったので、ファミリアを「ハデス・ファミリア」にへと変更させていただきます。

ご了承承願います。

目次

| | |
|--------------|----|
| プロローグ | 1 |
| 猛者と鍛冶師 | 4 |
| ハデス・ファミリア | 8 |
| 鍛錬的一幕 | 12 |
| 報告とアドバイザーの苦悩 | 16 |
| ロキ・ファミリア | 20 |
| 凶狼と小人の少女との約束 | 27 |
| 会議と依頼 | 31 |
| 仕事の話と酒盛り | 37 |
| 話し合いと予測 | 41 |

プロローグ

ここはダンジョン深層域五十七階層、屈強なモンスターが数多く存在している。

そんな場所に両手に二本の刀を握った一人の冒険者がいた。

その冒険者は白髪赤目の少年と呼ぶに相違ない容貌をしており得物である刀も特徴のない普通の刀、見るからに深層域で活躍出来るようには思えない。

だが、そのような考えはすぐさま修正をする事になった。

深層域のモンスター達が少年に襲い掛かっていくと、少年が二本の刀を振るうと瞬間に物言わぬ肉の塊となった。

「今日はこんな所かな。」

少年は刀に付着した血を払い落とし刀を鞘に納め、モンスターの魔石やドロップアイテムを回収していく。

すると、下の方から雄叫びが聞こえて来る。

「もう少しだけならいいかな。」

少年は嗤う、それは誰に向けるまでも無く、力量も分からず襲って来る愚かなモンスターに対してだ。

その言葉を最後に自分にとっての未到達領域五十八階層へと飛び込んで行った。

グオオオオオオオオオオオオオオオ!!

腹の底から響いてくる雄叫びが階層内に響き渡る。

五十八階層、竜の壺と呼ばれるこの階層には夥しい程の竜種モンスターが存在している。

その中を二本の刀を振るい猛進する先ほどの少年がいた。

「新しい刀が欲しいから素材を見つけないとなあ…。」

のんきに武器の新調を考えている少年だがその動きには迷いは無く確実に竜種モンスターを斬り捨てて行っている。

すると、少年の前に五十頭の竜が現れる。

「こりや、ちいとキツイかもな。でも…丁度良い!!」

砲 ヴォルガングドラゴン 竜と並び面倒な相手とされている竜種モンスター。

力と耐久に優れている地竜型モンスター ブラックコレスドラゴン 骸 竜、耐久と敏捷に優れている飛竜型

のモンスター ホワイトコレスドラゴン 骸 竜が二十五体ずつ少年の前に立ちふさがる。

そんな竜を五十頭を前にしている筈の少年は笑っていた、その理由は武器に使用する

素材が見つかったからだ。

黒骸竜・白骸竜の牙や骨は武器に、鱗や皮膜は防具に出来るからだ。

少年は刀を握り直し、竜の大群の中にへと飛び込んで行った。

少年と竜達の戦いは火山より噴き出るマグマよりも苛烈であった。

少年が竜の柔い部位を二刀で斬り込み、竜は爪や牙と尾を振るいブレスを放つ。

そうしている内に戦いを収束されていった、結果は少年の勝利で終わった。

少年は魔石やドロップアイテムを回収したのち、ダンジョンから本拠地にへと帰って
いくのだった。

深層域のモンスターを倒したたった一人の冒険者、しかも弱冠十四歳の少年がやって
のけた偉業は語られる事は無いが少年が刻みし髑髏に大鎌の紋章にしかと刻み込まれ
ていた。

その偉業を成し遂げた少年の名前はベル・クラネル、後に『冥王』と呼ばれるlev
e110の第一級冒険者でありハーデス・ファミリアの団長である。

猛者と鍛冶師

俺ベル・クラネルはダンジョンから戻ると集めた魔石を換金してすぐに武器の新調をするために「ヘファイストス・ファミリア」へと速足で向かっていった。

すると、そこである人物に声をかけられる。

「久しいな、ベル・クラネル。」

「そうだな、^{オツタル}【猛者】」

ある人物と言うのはオラリオ最大派閥の一角である「フレイヤ・ファミリア」団長オツタルだ。

【ハデス・ファミリア】団長ベル・クラネルと【フレイヤ・ファミリア】団長オツタルの邂逅は周りにいる者たちの緊張感が増すばかりである。

そして、最初に口を開いたのは俺だ。

「何か用か、今日は忙しくてな時間が空いていない…。」

俺がそう言うと、オツタルは平然とした顔でこう言ってくる。

「そうか、久々に酒でも酌み交わそうと思ったのだが用があるので仕方あるまい。出直すでしょう。」

俺の言葉にオツタルはそれを受け入れ、帰っていった。

オツタルがいなくなると周りの者たちはホツと一息をつく。

俺はそれに構わずに「ヘファイストス・ファミリア」にへと足を向けるのだった。

「ヘファイストス・ファミリア」のとある工房では一人の青年が深く考え込んでいた。

その理由は…。

「ダメだ、中々こいつの名前が決まらねえ。」

そう、武器の名前である。

うんうん、考えている所に俺は入っていく。

「ヴェルフ、また名づけで迷ってるのか？」

青年の名前はヴェルフ・クロツツ、ベル・クラネルの専属鍛冶師^{スミス}でlevel5の
上級鍛冶師^{ハイスミス}でもある。二つ名は紅炎^{ヴァルカ}の鍛冶師である。

「よお、ベル。なあ、こいつの名前どれがいいか選んでくれ!!」

手渡された紙にはヴェルフの持っている短剣の名前を考えたと思しきものが書かれ

ていた。

もうこまる
猛虎丸

トラタン
虎短剣

らいと
煌虎

俺はその紙を見た後にこう言った。

「ヴェルフ、猛虎丸でいいと思うぞ。」

そう言いながら渡された名前の紙をヴェルフに渡す。

ヴェルフは笑顔を浮かべながらこう言ってくる。

「猛虎丸か……。よし、こいつの名前は猛虎丸だ!!」

こうして、短剣の名前も決まったことで、俺はここに来た目的を口にする。

「ヴェルフ、武器と防具を新調したいんだけど……。」

俺がそう言うと、ヴェルフはこう言ってくる。

「応、今度はどんな刀を打てばいいんだ。素材は持ってきてくるのか?」

「ああ、今回の武器の素材にしようと思ったのはこいつらだ。」

そう言ってくるヴェルフに対して俺は深層で手に入れたドロップアイテムを見せた。

ブラックコルブストドラゴンホワイトコルブストドラゴン
「黒 骸 竜と白 骸 竜のドロップアイテムか、こいつで作ればいいんだな。任せて

おけ!!」

ヴェルフはそう言って手拭いを頭に巻いて早速作業に取り掛かろうとしていた。

「何日かはダンジョンには潜らねえからじっくりやってくれて構わねえよ。」

俺がそう言うと、ヴェルフはこう言って来る。

「何言ってるんだよ、最高の装備を整えるのは冒険者の義務だぜ。だから、最高の武器と防具を仕上げてやるよ!!」

ヴェルフは素材を仕分けながらそう言って来るのに対して俺はこう言った。

「確かに、今度酒でも奢るよ。」

俺はそう言いながら帰ろうとするとヴェルフがこう言って来る。

「応。」

それだけの会話を終えて俺はハデス・ファミリアのホームにへと戻っていくのだった。

ハデス・ファミリア

オラリオの東に位置するその場所には周囲一帯の建物よりも群を抜いて長大な城に近い館が立っている。

そこは黒一色の館でまるで常闇を思わせるほどである。

中心の一番高い場所には鎌グを背負リつた髑髏ムの旗が立てられており、今は茜色リッに染まりながら風になびかれている。

【ハデス・ファミリア】本拠、冥府の館

【ハデス・ファミリア】は最大派閥の中でも若い部類に入る、若いと言っても上位派閥を諸共しない実力者が数多く所属している。

「ただいま。」

俺がそう言いながらホームの中に入ると、団員達からお帰りなさい、と出迎えられる。「朝から今まで状況報告を教えてください。」

「じゃあ、私からいいかい？」

俺がそう言うのと、褐色肌に煽情的な肉体をしている黒髪紫目のアマゾネスがこう言うて来る。

彼女の名前はレナ・ルーシエ、「ハデス・ファミリア」の最古参幹部の一人であり level 5の第一級冒険者。二つ名は「ブラッドテイワルキユレ血塗れの戦女」

「どうした、レナ。」

「団長、ロキ・ファミリアから遠征のお誘いがあったんだけど…、どうする?」

俺はそれを聞いて顎に手を当てて考えてからこう言った。

「分かった、その話は俺に任せろ。で、他は?」

レナの用件は俺が片づける事となり、次の報告を聞くことにした。

「団長、俺からもいいですか?」

そう言ってくるのは赤髪赤目の虎ワータイガー人の男がこう言ってくる。

彼の名前はラウ・ティグレ、「ハデス・ファミリア」の最古参幹部の一人で level

6の第一級冒険者。二つ名は「ベにとら紅虎」

「ああ、ラウのはどんなの?」

「シユリーム古城跡地への盗賊討伐依頼がギルドから来てるっす。」

「盗賊?」

俺はラウの言葉を聞いて疑問符を浮かべる。

続けて、ラウがこう言ってくる。

「はい、何でも日に日に被害が増大しているらしくて討伐してほしいとの事っす。」

「分かった、お前とレナで部隊を編成して討伐に向かってくれ。」

「了解す。」

「了解、団長。」

盗賊の事はラウたちに任せるとして…。

「他はもう無いか？無ければ俺は部屋に戻るからな。」

最後の確認として団員達に聞くと、誰も何も言わなかったため俺は自室に向かった。

部屋に向かっていると、向こうの方から青紫の髪に桃色の眼をしたゴスロリ少女がやって来る。

「ベル、おかえり。」

そうやって来る少女に俺はこう返した。

「ただいま、ハデス。」

そう、俺の目の前に立っているゴスロリ少女が「ハデス・ファミリア」の主神ハデスだ。

「ベル、今日もダンジョンに潜ってたの？」

「ああ、武器と防具を新調したかったから。でも、明日からしばらくはホームにいるよ。」

ハデスの言葉に俺はそう返すと、それを聞いたハデスはこう言ってくる。

「十分すぎるくらいに休息を取る事、これは主神としての命令。」

「分かっているって、ハデス。」

俺の言葉を聞いたハデスは満足したのか自分の部屋にへと戻っていった。

俺も自分の部屋に戻ると、刀と防具を脱装して食事と入浴を済ませて眠りにつくのだった。

鍛錬的一幕

翌朝、目を覚ますと俺は二刀を手にして日課の素振りをして鍛錬場に向かった。

鍛錬場に着くと、そこにはハーデスがいた。

「おはよう、ベル。」

「おはよう、ハーデス。」

俺達は互いに挨拶を交わした後、俺は素振りを始めそれをハーデスが眺めている。すると、鍛錬場の扉が開いた。

扉の方に視線を向けると、そこには水色の髪に赤目の小人族バルウムの少年が立っていた。

「だ、団長にハーデス様!! お、おはようございます!!」

少年は俺達に驚きながらも挨拶をしてくる。

「ああ、おはよう。」

「おはよう、デイレン。」

デイレンと呼ばれる少年がオドオドしながらこう言ってくる。

「は、初めまして、ベル・クラネル団長。ほほ、僕はデイレン・ラトードと言います。えつと、邪魔してしまったのでは…。」

自己紹介と共にそう言ってくるデイレンに対して俺はこう言った。

「よろしくな、デイレン。邪魔なんてしてないよ、この時間は俺以外に来るのはハーデスくらいだったから驚いたただけだよ。」

俺は素振りを続けながらそう言い、デイレンに対してハーデスがこう言ってくる。

「デイレン、今ならベルに鍛えて貰えるけどどうする？」

「ええ、団長に!!」

ハーデスのいきなりの言葉に驚きを隠さない。

だが、これは俺にとってもいい話だ。

最近、ダンジョンに行つてばかりだから団員達との交流が疎かになっていると感じていたからな。

「来いよ、デイレン。時間は限られてるが、それでもいいなら鍛えてやるよ。」

俺がそう言うと、デイレンは嬉しそうにしながらこう言ってくる。

「団長、よろしくお願いします。」

「じゃあ、好きに打ち込んで来い。」

俺がそう言うと、デイレンは持っていた槍を身構えたまま俺の周囲をグルリと回る。

それに対して、俺はの動きに合わせて動き背後を取らせない。

すると、デイレンが中々鋭い突きを放ってくるが槍を躲して自分の足をの足に引っ掛

けて転ばした。

転ばされたデイレンは顔面から派手に地面に激突した。

「だ、大丈夫か？」

俺がそう呼びかけると、デイレンは直ぐに立ち上がってこう言った。

「はい、大丈夫です!!」

そう言ってくるデイレンに対してきつきの攻撃について指摘をする。

「相手を観察し攻撃にも躊躇いは無かったけど、足元が留守にするのは良くない。それに今は訓練だったから良かったものの、これがダンジョンならモンスターにやられる。」

俺の言葉にデイレンは落ち込んでしまう

「そんなに落ち込むな、お前はまだまだこれからなんだ。自信を持ってよ。」

俺はデイレンにそう言いながら二刀を鞘に納めると朝食の時間を知らせる鐘が鳴った。

「丁度良いタイミングだな、汗流してから飯食いに行こうぜ。」

俺はそう言ってデイレンと共にシャワー室に行き、ハーデスは先に食堂に行くのだった。

「うふふ、若い芽が育っていくのを見るのは良いわね。」

そんなハーデスの一言は俺とディレンの耳に届くことは無かった。

報告とアドバイザーの苦悩

団員達と朝食を済ませた俺は執務室に入って紅茶を飲みながら盗賊討伐に向かったラウとレナからの報告書に目を通していた。

「どうやら、こちらに負傷者を出さずに完全に討伐をこなしたみたいだな。」

団員に負傷者ゼロと言う報告に満足しながら俺は討伐完了の報告書を持ってギルドにへと向かった。

ギルドに着くと、周囲の視線が俺に向けられてくる。

「おい、あれって冥王だよな？」

「ああ、あの年で迷宮都市最強だろ、ヤバ過ぎるだろ。」

「団員も強者揃いときたもんだ、どれだけデカくなるのやら…。」

そんな会話を聞き流しながら俺は担当アドバイザーのもとにへと近づいていく。

「エイナさん、お久しぶりです。」

俺が声を掛けたのは俺の担当アドバイザーであるハーフエルフのエイナ・チュールさんである。

「ベル君、君また一人で深層に向かったでしょ！いくら実力があるからって一人はダ

メって言ったでしょ!!」

出会い頭にお説教をしてくるエイナさん。

ヤバい、これは長いパターンだ。

「それに君は団長の立場にいるんだから軽率な行動は控えるべきなの!!」

「すいません…。」

エイナさんの言うことに返す言葉もなく謝るしかない。

俺が謝るとエイナさんは深い溜息を吐いた後にこう言ってくる。

「ファミリアだって団員がいるんだし、もっと仲間を頼ったほうが良いよ。」

「はい。」

エイナさんの言葉に俺は同意することしかできなかった。

「それで、今日はどんな事でギルドにやってきたの?」

そう言ってくるエイナさんに対して俺はここに来た目的を果たす。

「ギルドが俺達に依頼してきた盗賊討伐の報告書を持ってきました。」

俺はそう言いながらエイナさんに報告書を渡した。

「確かに受け取ったわ、用件はそれだけかな?」

「そうです、それじゃあ。」

エイナさんの確認の声に俺はそう返してギルドの出入り口に向かっていく。

「さて、次は…。」

「もう、ベル君ったら相変わらず無茶してるな〜。」

私、エイナ・チュールはさつきまで話していた担当冒険者であるベル・クラネル氏の行動の無茶に悶々とさせられていた。

「エイナ、どうしたのって聞くまでもないね。さつきのエイナの声こつちにまで聞こえてたし。」

私は同僚で友人のミイシヤがそう言ってくる。

というか、向こうの方にまで聞こえてたなんて恥ずかしいよ。

私が顔を赤くしていると、ミイシヤがこう言ってくる。

「あんなに若いのに最強って称号はすごいプレッシャーだよ、だからエイナが少しでも支えに鳴ってあげないとね!!」

ミイシヤの言葉を聞いて私はハツとした。

そうだよ、最強という立場は常に何かしらの重圧を受け続けている。

私が少しでも軽減できるようにしてあげないとね!!

それを教えてくれたミイシヤにも感謝しないとね。

「ミイシヤ、…何してるの？」

私がお礼を言おうと振り返ると、そこには大量の書類を持ったミイシヤがいた。

「えっと、エイナ手伝って!!」

そう言っただけのミイシヤに対して私はこう言った。

「一人でやりなさい!!」

もう、この子っただら!!

ロキ・ファミリア

俺は今、酒場に来ている。

理由は今から行くファミリアに関係している。

そのファミリアの主神は大の酒好きで飲んだ酒は無いくらいの酒豪ぶりだ。

「えっと、このふたつかな。」

そう言つて俺が手に取つたのは「ソーマ・ファミリア」の神酒ソーマとドワーフの火酒数十本である。

多少出費してもこのくらいならば問題は無いくらい稼いでるからな。

それを五つほど購入したのち、俺は目的地である「ロキ・ファミリア」の本拠にへと向かった。

オラリオの北側、そこにはオラリオ最大派閥の一角「ロキ・ファミリア」の本拠、黄昏の館が建っている。

「ハデス・ファミリア団長ベル・クラネルだ、遠征の話で来た。」

俺は館の入り口に立っている門番にそう言うと、門番の一人が館の中に入っていき報告しに行ったのだろう。

すると、館の中から勢い良く走って来る一人のアマゾネス。

「ベルー!!」

そう言つて走つて来るのはロキ・ファミリアの level 15 の第一級冒険者で【^{アマゾン}大切断】の二つ名を持つティオナ・ヒリュテ。

ティオナは一直線に俺のところへやってきて抱き着いてくる。

「えへへ、ベルだ〜!!」

そう言いながら満足そうに笑顔を浮かべるティオナ。

「ティオナ、フィン在所まで案内してくれ。」

「うん、いいよ!」

俺はティオナに案内役を頼み、黄昏の館へと入つていった。

中に入ると、そこにはロキ・ファミリアに所属する団員達の視線が俺に向けられる。

「全く、ここは変わらないな。」

そう言つて、ティオナがこう言つて来る。

「そうかもね、他のファミリアの人が来れば何処も同じじゃないかな?」

そう言つて来るティオナに対して俺は同意をしながら歩いてると向こうの方から

金髪金目の少女がやってくる。

「あつ、ベルだ。」

「よお、アイズ。」

この金髪金目の少女の名前はアイズ・ヴァレンシユタイン、【劍姫^{けんき}】の二つ名を持ち俺に次ぐ最強のヒューマンである。

「ベル、今日はどうしたの?」

そう言いながらトコトコと近づいてくるアイズに対して俺はこう言った。

「今日はフィンと話があつてな。」

「それって遠征の話?」

「ソレ、本当!!」

俺の一言にアイズが遠征の事を口にするるとティオナがそれを本当かと言ってきた。

「ああ、俺達はロキ・ファミリアの遠征に参加させてもらう。」

俺がそう言った瞬間、ティオナは更に笑顔になりギューツと腕に抱き着いてくる。

別に痛くは無いのだが、周囲からの視線を集めているため物凄く居づらい。

「ティオナ、早くフィンの所に行かないと。」

アイズがそう言うと、ティオナはそうだったと言って俺の手を引つ張りながらフィン
の所まで行くのだった。

俺はテイオナに手を引かれて執務室に着くとテイオナ達は買い物に行くと言って別れた。

その後、俺は執務室のドアをノックをする。

「どうぞ。」

中から入室の許可が下り、俺が入っていくとそこにはロキ・ファミリアが誇る三人の首脳陣がいた。

「ようこそ」「ロキ・ファミリア」へ、「ハデス・ファミリア」団長ベル・クラネル殿。」

そう堅苦しい言葉を言ってくるのは「ロキ・ファミリア」団長であり「勇者」の二つ名を持つ小人族のフィン・デームナ。

「堅苦しい挨拶はやめてくれ、「ロキ・ファミリア」団長フィン・デームナ殿。」

俺が苦笑いを浮かべながらそう言い返すと、フィンも苦笑いを浮かべる。

「ベル、今回の遠征に参加してくれることに感謝するぞ。」

そう言ってくるのは「ロキ・ファミリア」副団長であり「九魔姫」の二つ名を持つ王族エルフのリヴェリア・リヨス・アールヴ。

「ああ、その事なら気にしなくていいさ。俺達も「ファミリア」での到達階層の更新をし

たかった所だったからな。今回のお前らの遠征に便乗させてもらおうと思ったただだ。」

それを聞いたリヴェリアは薄く笑みを浮かべると、そう言う事かと述べた。

「まあ、ともかくにもこれで遠征の話は終わつたじやろう。これから酒宴と言うのはどうだ？」

遠征の話が終わると見るや酒宴と口にするのは「ロキ・ファミリア」最古参の首脳陣の一人であり「重傑」^{エルガラム}の二つ名を持つドワーフのガレス・ランドロック。

「丁度良いな、ここに買ってきたドワーフの火酒と神酒^{ソーマ}があるから飲もうか。」

俺がそう言うと、執務室の扉が勢い良く開かれた。

「今、神酒^{ソーマ}ってゆうたか!!どこや、何処にあるんや!!」

そう言つて入ってきたのは目を血走らせて朱髪糸目の女性が入ってくる。

その女性を見た瞬間、フィンはハハツと苦笑いをし、リヴェリアは額に手を当てて溜息を吐く、ガレスは笑っていた。

俺の反応はまたか、と言つた表情をしているだろう。

すると、朱髪の女性が俺に気付きこう言つて来る。

「お、ベルやないか。自分、ここで何しとんのや?」

そう言つて来る女性に対してこう言つた。

「神酒ソーマと言っただけでここに突撃を掛けてくるとは思わなかつたですよ、神ロキ。」

そう、酒好きの女性は「ロキ・ファミリア」の主神ロキである。

「なんや、ベル来とつたんか。それよりも、神酒ソーマがあるつてホンマか？ぐべぶつ！」

鬼気迫る顔でそう言つて来るロキの頭上に結構きつめの手刀が落ちてきて、女神が上げてはいけない声が上がつた。

その手刀を放つたのはリヴェリアだつた。

「なにすんねん、リヴェリア〜。」

ロキが文句の言いたそうな顔をしながらリヴェリアの方を見る。

「ロキ、お前はもう少し落ち着きを持つたらどうだ？」

その一方で、リヴェリアは呆れながらそう言つた。

「だつて、神酒ソーマがあつたらそうなつてまうんや。」

リヴェリアの言葉にロキは素晴らしい返す。

俺はそれに対して変わつていないと思ひながらもこう言つた。

「構わないよ、リヴェリア。ロキの性根は言つても治らないつて事くらい分かつていてしょ。」

俺の言葉を聞いてフィンとリヴェリアとガレスの三人は笑い、ロキは口をひくひくとさせていた。

水)。まあ、それはさておき俺達は神酒と火酒を飲みかわすのだった（リヴェリアは果実

凶狼と小人の少女との約束

黄昏の館での酒宴を終えて俺がホームに帰ろうとすると、酒を飲んで顔を赤くさせているフィンがこう言ってくる。

「ベル、遠征に出発するのは来月の十日だ。それまでに準備を整えておいてくれ。」
「分かった、団員達にもそれを伝えておこう。」

フィンの言葉に俺はそう言い返した後、ホームにへと戻っていくのであった。

オラリオの街中をほろ酔い状態で歩いていると、前方からダンジョン帰りの狼ウエアウルフ一人人が現れた。

「デメエ、なんでこんなところにいやがる。」

その狼人は俺の顔を見るなり、牙をむき出しにして威嚇をしてくる。

「そいつはご挨拶だな、簡単に言えばお前の所属しているファミリアに用事があった、だ。」

狼人はそれを聞くと、ハツとした顔になりこう言ってくる。

「遠征の話か…。」

「そういうこつた、ベート・ローガ。」

ベート・ローガと呼ばれた狼人は不機嫌な顔を更に顰めてどこからどう見ても悪人面にしか見えない。

しかし、この男ベート・ローガもまた、オラリオ最強ファミリアの一角「ロキ・ファミリア」に籍を置いているlevel5の第一級冒険者、二つ名は「凶狼」グアルガンドである。

「で、お前から来るのか？」

そう言ってくるベートに対して俺はこう言った。

「ああ、俺達もお前らの遠征に同行させてもらう。」

「そうかよお、まあテメェんところからなら足手纏いになる雑魚がいねえからマシってモんだ。」

俺の言葉を聞いた後、そう悪態をつくベート。

俺はそれを見ていて、やれやれという感じながらこう言った。

「それじゃあ、俺はホームに戻るとするよ。」

「サツサと行きやがれ！」

俺がそう言うのと叫ぶように言ってくるベートの横を通り過ぎながらホームへと歩いて行くのだった。

ホームに帰って来ると、一人の小人族バルウムの女の子が傍にやって来る。

「ベル様、何処に行っていたんですか！リリは一日中探し回ったんですよ!!」

俺にそう言うてくるのは「ハデス・ファミリア」のサポーターの一人であるリリルカ・アーデ。level 3。

彼女は元々ソーマ・ファミリアだったのだが、ハデスが彼女とソーマ・ファミリアの現状をギルドから知ってブチ切れて戦争遊戯ウォーゲームを仕掛け、勝者となった俺達はまだ幼かった彼女を含めたソーマ・ファミリアの子供たちを要求したのだった。

ハデス・ファミリアに入る事を決めたりり以外のその子供達は孤児院に預けられて幸せに暮らしている。

子供達の安全を考えてハデスう・ファミリアちのlevel 4から下の団員達にローテーションで護衛を務めている。

そして、今ではソーマ・ファミリアは酒を生産し販売する商業系ファミリアとして活動をしている。

まあ、一部の団員は監獄行きになったけどな。ザマア。

「悪かったよ、リリ。それで俺に何か用か？」

俺がそう言うと、レナがやってきてこう言うってくる。

「団長、今日から遠征までの間ダンジョンには足を運ばないって聞いたから買い物に誘おうと思ってたのに居なかったからへそ曲げてるのよ。」

そう耳打ちしてくるレナの話を聞いて俺はリリの頭を撫でながらこう言った。

「悪かったな、リリ。明日にでも買い物に行こうか。」

俺がそう言うとリリは笑顔になってはい、と言ってくる。

こうして、俺の休日の日一日目が幕を閉じた。

会議と依頼

ロキ・ファミリアとの会談から翌日、朝食を済ませた後幹部全員を会議室に集めた。

「これよりロキ・ファミリアとの遠征に向けての準備を始めるぞ。」

俺がこう言つて切り出すと、ウエアウルフ狼人の女性がこう言つてくる。

「まずは食料について……。」

「んじや、オレは他の奴らを連れて日持ちのする食料を買い占めてくるぜ。」

俺の言葉を遮りそう言つて立ち上がった狼人の女性の名前はアリサ・ヴォールク、【ハ
デス・ファミリア】幹部にしてlevel6の第一級冒険者、二つ名は【黒衣レイトの狼】

「…分かった、他のファミリアと喧嘩になるなよ。それと干し肉なんかは前日くらいに
買い出しすればいいからな。」

俺は食料調達を任せるが、性格が好戦的でもあるため諍いをするなど釘を刺してお
く。

分かつてるよ、とアリサはそう言つては会議室から出ていく。

「…悪いが、レナはアリサについて行つてくれ。」

「了解、こんな時にどこかと揉めたりしたら遠征どころじゃなくなるしねえ。」

それでも不安が残っているため、レナを同行させることにした。

レナは二つ返事で受け入れ、アリサを追って会議室を出て行った。

次に、「回復薬^{ポーション}などのアイテムはリエラに任せる。ただ、想定外のことも考えてミア・ファミリアへの注文の量をいつもの遠征の二倍受注しておいてくれ。」

「分かりました、団長。」

名前を呼ばれたハイエルフの女性はリエラ・ヒューレー、「ハデス・ファミリア」幹部にしてlevel6の第一級冒険者、二つ名は「終末^{ラッグ}の魔姫^{エル}」

「ラウには「ヘファイストス・ファミリア」に出向いてもらって魔剣の受注を頼むよ、万が一が無い事を祈ってはいるが。一応、魔剣の事に関しては俺の方でヴェルフにも掛け合っておくから。」

「了解です。」

次に、ラウに魔剣の受注をヘファイストス・ファミリアに受注を頼むと共にヴェルフの事を伝えておく。

「手入れに必要な砥石なんかも必要になって来るからかなりの量になるからサポーター陣も覚悟しておいてよね。」

「はい、団長!!」

俺の言葉に対してサポーター陣も気合の入った声で答えてくる。

それを見渡した俺は解散の一言を述べると、全員がそれぞれの役目を果たすために行動を開始する。

「さて、俺もヴェルフの所に行ってくるかな。」

俺は自室に戻り、装備の代金をもってヴェルフの工房へと向かうのだった。

工房に着くと、俺は扉をノックしながら声をかける。

「ヴェルフ、装備の代金もつてきたよ。」

俺がそう言いながら工房の中に入ると、そこには一振りの漆黒の刀を持って満足そうな顔をしているヴェルフがいた。

「ヴェルフ」

俺が声をかけると、ヴェルフは黒刀を鞘に納めながら近づいて来る。

「ベル、最高の出来に仕上がったぜ！」

ヴェルフはそう言いながら鞘に納めた黒刀を渡してくる。

黒刀を受け取った俺はあることに気づいた。

「重いな、この黒刀。」

俺の言葉にヴェルフはこう言ってくる。

「ああ、今回の武器は深層のモンスターにも対応できるように最上質の超硬金属と
ブラックコープス・ドラゴン
黒 骸 竜の牙・爪・骨に加えて極東にある最上質の玉鋼で鍛え上げたんだぜ。それに

こいつには不壊属性デュランダルも付加させたからな。攻撃力・耐久力も一級品だ。その分の重量もあるけどな。その刀の重量だとに等を振るうのは無理だからな。防具の方は最上質の超硬金属アダマンタイトと白骸ホワイトコープス・ドラゴンの鱗・逆鱗・皮・被膜でお前の早い動きに支障が出ないように出来る限りの軽量化を施しておいた。」

そう言っているヴェルフの話聞きながら鞆から刀を抜くと、漆黒の刀身が顔を出す。

その刀身は新月の夜を思わせるほどに暗くありながら刀の鋭さが際立っている。

防具の方に目を向けると、そこには白い光沢を放つ髑髏のライトアーマーが飾られていた。

手に取ってみると、前の防具よりも数段軽くなっている事が分かる。

「流石だな、ヴェルフこんなにも早く第一等級武装を仕上げてくるなんて。それで名前は何んて言うんだ？」

俺の言葉に対してヴェルフはこう言ってくる。

「そいつの名前は骸骨丸・黒、防具の方は白骨丸だ。」

「ヴェルフ、それは流石にない。」

「そ、そうか……。じゃあ、名前はベルに任せるわ。」

「それじゃあ遠征に出発するまでに考えておくよ。」

「分かった。」

俺の装備の事で話をした後に俺は今回ここに来た本題に入った。

「ヴェルフ、今回ここに来たのは代金を払いに來ただけじゃないんだ。」

そう言うと、ヴェルフの顔が真剣なものに変わった。

「それはロキ・ファミリアとの合同遠征に関わってる事か？」

ヴェルフの言葉に俺は無言のまま首を縦に頷かせる。

それを見たヴェルフは竈に火を起こしこう言ってくる。

「欲しいのは得物ものはなんだ？」

「話が早くて嬉しいよ、簡単に言えば魔劍だ。」

それを聞いたヴェルフはこう言ってくる。

「必要な数は？」

「最低で五十振りを頼みたい。」

「分かった、期日はいつまでだ？」

「来月の半ば。」

「それなら余裕で間に合うな、任せておけ。」

「とづくに任せてるって。」

俺達の会話はスムーズに進んでいき、ヴェルフは魔劍の制作に取り掛かり始めてくれ

た。

「それじゃ俺は帰るよ。」

「応、これが終わったら酒奢れよな。」

「分かつてるって。」

そう言葉を交わしあつた後、俺は工房を後にするのだった。

仕事の話と酒盛り

装備の代金を払ってヴェルフの鍛冶場を出た後、俺は遠征の申請をする為にギルドにへと向かった。

「エイナさん、こんにちは。」

「こんにちはは、ベル君今日はどうしたの?」

俺が挨拶をするとエイナさんも挨拶と同時に用事があるのかを聞いて来る。

「ええ、今日は遠征の申請をしておこうと思ひまして。」

「そうなんだ。でも、遠征の申請は「ハデス・ファミリア」だけじゃなくて「ロキ・ファミリア」からも来てるんだよね。だから、遠征の申請は見送った方がいいんじゃないかな?」

そう言つて来るエイナさんに対して俺はこう言つた。

「大丈夫ですよ、エイナさん。」

「どうして?」

俺の言葉に疑問符を浮かべているエイナさんにこう言つた。

「今回の遠征は「ロキ・ファミリア」と合同で行うんで。」

俺がそう言うと、エイナさんがこう言ってくる。

「そうなの、分かったわ。それじゃあ遠征の申請しておくね。」

「お願いします。」

そう会話を終えると、エイナさんは遠征の申請を済ませていく。すると、後ろから声を掛けられる。

「おお、久しいなベル!!」

「椿、久しぶりだな。」

声をかけてきたのはヴェルフが所属する「ヘファイストス・ファミリア」level 5の団長にしてオラリオ最高の鍛冶師である椿・コルブランド。

「珍しいな、お前が工房から出ているとは。」

「実は主神様に頼まれてな、申請をしに来たのだ。」

「そうか、じゃあな。」

俺はそう言つてその場を去ろうとするとこう言つて来る。

「いやいや、少し待て。この後は手前も時間が空くのだ、少し話をしないか？」

「少しくらいならいいぞ、それと美味しい酒があればなお良しだ。」

「では、決まりだな。」

俺は椿の誘いに乗って焔蜂亭へとやって来た。

「それで俺に何か用でもあるのか？」

「いやなに、ちつとばかり世間話をしようとも思ってたな。」

俺がそう言うのと、名物の蜂蜜酒をグラスに注ぎながらそう言うて来る。

「ベル、この前一人で五十八階層に行ったそうだな。」

「まあな、そのせいでエイナさんにどやされたが。」

「ハツハツハ、冒険者に冒険をするなどというのは無理な話だということにな。」

「確かに鍛冶師に鍛冶をするなどというものだ。」

椿は俺の話笑笑してから酒を一口飲み、俺も一口酒を飲む。

「それで話は変わるのだが、その時の深層のドロップアイテムを手前に売ってくれ。」

「悪いな、その時のドロップアイテムは俺の新しい武器を作るために使っちゃった。」

「何、そうなのか!?!しまった、出遅れてしまうとは……。」

俺の言葉を聞いて椿はショックを受けてながらそう言った。

そんな椿の様子を見て、俺は新しい武器を見せてくれと言われたら余計に長くなると思いい、この話を振る。

「椿、それなら今度の遠征で得た深層で得たドロップアイテム三分の一をお前に売ってやる。」

「本当か、ベル!?!」

「ああ、その代わりにドロップアイテム使ってウチの幹部連中の武器を作ってくれよ。」

「無論だ、手前も鍛冶師として最高の武器を提供しよう!!」

椿は胸を張ってそう言った。

「ああ、頼んだぜ。」

「任された! あつ、そう言えばベルに会う前から紅虎に魔剣の依頼を受けたのだが、近い内に遠征に行くというのか?」

「ああ、そうだ。」

その問いかけに俺そう答えると、椿がこう言ってくる。

「では、ドロップアイテムの件頼んだぞ。」

「ああ、分かったよ。」

その話の後、俺と椿は世間話をしながら酒盛りを続けるのだった。

話し合いと予測

椿との酒盛りの後、サンサンと晴れ渡る空の下を新装備を持って店を出るとまっすぐに本拠にへと戻っていくのだった。

本拠に戻ってくると、団員達が遠征の為の準備を整えている。

「団長、今までどこに行ってたのさ？」

そう言って来るレナに対して俺はこう言った。

「ああ、遠征の申請に行った時に椿と会ってな。それで商売の話をしてきたただけ。」
「それならリエラも【ミアハ・ファミリア】からの冒険者依頼を受けてきたんだよ。」

俺がそう言うと、レナが依頼の追加を言って来る。

その件に関しては受けたりリエラの方が把握しているから直接行く事にした。

「リエラ、【ミアハ・ファミリア】の依頼の内容は何なんだ？」

「はい、【ミアハ・ファミリア】の依頼は五十一階層にいるカドモスの泉にある要求量の泉水だそうです。」

「これって【ディアンケヒト・ファミリア】の冒険者依頼と被ったりしないよな……。」
「ありえそうですね……。」

そこはかたなく不安に感じる俺とリエラに、アリサがやって来てこう言ってくる。

「団長、ハデスが遠征の事で話があるってさ。」

「分かった、すぐ行く。」

そう言ってくるアリサに俺はそう答え、この件は後でリエラと話し合う事にした。

コンコン

「ハデス、入るぞ。」

俺がハデスの部屋にノックをして入ると、そこには紅茶を飲みながらこう言ってくる。

「ベル、今回の遠征気を引き締めていきなさい。」

「どういう事だ、ハデス。」

ハデスの言葉に疑問符を浮かべる俺。

それに対してハデスはこう言ってくる。

「ただの女のカンよ。」

「カンなのかよ!?!まあ、お前の言う事だし肝に銘じておこう。」

「ありがとう、ベル。」

そう話していると、ドアをノックする音が響く。

「団長、おるかのう。」

「ああ、入っていいぞ。」

扉を開けて入ってくるのは一人のドワーフ。

そのドワーフは幹部の一人でlevel6の冒険者であるレギム・スチルド、二つ名は【剛力の巨士】

「おお、なんじゃ話の腰を折ってしもうたかのう。」

分が悪そうに言っ来て来るに対して俺はこう言った。

「気にすんな、もう話は済んだ所だ。」

その言葉を聞いては安どした様子でこう言っ来て来る。

「そうじゃったか、それならよかった。団長、ダンジョンに潜る際の編成はどうなってるんじゃ?」

「ああ、それなら二つの部隊に編成するつもりだ。第一部隊の指揮は俺が取り、第二部隊の指揮はラウに任せるつもりだ。」

「分かった、他の幹部連中にはワシから伝えておこう。」

「ああ、頼む。」

そう言っレギムは部屋から出ていくのだった。

「さて、俺も新しい装備の試運転で誰かに相手してもらおうかな。」

そう言いながら身体を伸ばしていると、ハデスがこう言ってくる。

「アリサとに相手をして貰えばいいわ、あの子この時間帯は鍛錬場にいるから。」
「分かった、行って来る。」

そう言って俺は新しい装備を身に付けて鍛錬場に向かうのだった。